

# 学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

“事実と価値”に関する一考察  
- Dasgupta [2001] の若干の検討を事例に -

申請者指名

椿 光之助

本稿は、昨今の世界情勢のように、社会、環境、世論等の情勢が大きく変化する際に、専制的な政策を避けながら変化に適応し、人々の生活を守るために重要性を増す“事実と価値”の問題の研究の進展に貢献することを目的とする。

本稿は、Dasgupta [2001] の“事実と価値”の記述を詳しく分析し、“事実と価値”の問題に関する論争である Putnam-Dasgupta 論争を、Su and Colander [2013] とは異なる方法で決着に導くことを研究課題とする。

本稿で行う Dasgupta の“事実と価値”の“Conception”を用いた考察は、Putnam-Dasgupta 論争の先行研究とは異なる新しい解決方法の提示という意義を持つ。更に、本稿の結論は、従来の“事実と価値”の議論の方向性を、能力に限界がある人々が不完全情報に直面する「機能不全の社会」を考慮したものへと大きく転換させる可能性を持つ。

Putnam-Dasgupta 論争とは、Su and Colander [2013] が研究した“事実と価値”の問題に関する論争である。Su and Colander [2013] は、この論争において、双方の意見が食い違っていることから、紛糾が長期化したと説明している。

Su and Colander [2013] の分類によると、Putnam and Walsh の“事実と価値”の“Conception”は、“The Non-separatist View”である。一方、Dasgupta の“事実と価値”の“Conception”は、“The Separatist View”であるとした。ところが、Putnam and Walsh は、Dasgupta の“事実と価値”の“Conception”を“The Naïve Positivist View”であると捉えたことから、論争の焦点が食い違った、と Su and Colander [2013] は説明した。

一方、本稿は、Dasgupta の“事実と価値”の“Conception”を Putnam and Walsh と同じ“*The Non-separatist View*”であると考え、その根拠は、次の通りである。

- Dasgupta 自身が、“事実と価値の絡み合い”を認める記述を Dasgupta [2001] において行っている。
- Dasgupta [2001] の“事実と価値”に関する記述には、価値観を“epistemic values”と“non-epistemic values”に分類することに繋がるような記述等々、Dasgupta の“事実と価値”の“Conception”が“The Separatist View”であることを示す証拠はない。
- Dasgupta の福祉の測定方法の前提条件としての社会情勢は、人々が不完全情報に直面する「機能不全の社会」であると考えられる。「機能不全の社会」は、人々の思考や認識の能力に限界があることを想定することで発生させることができる。そして、この情勢で形成される事実認識は、外界の真の実態としての事実とは明確に区別される。

この事実認識が、記憶され、再び呼び出され、価値判断に動員された時、価値観となると考えられるので、事実認識と価値観の構成要素は共通している。そのため、事実認識と価値観を、それが示す情報の内容で区別することは困難であることから、この両者は「絡み合っている」と表現することができる。

- Su and Colander [2013] の “The Separatist View” は、“epistemic values” が事実と絡み合うことは避けられないと考える。この “epistemic values” は、正確な客観的事実としての <C>FACTS の形成を目指すものである。他方、Dasgupta の “事実と価値” の “Conception” において科学の価値観が絡み合うのは、相対化された科学的事実認識としての <A> “fact” である。よって、“epistemic values” と「科学の価値観」という 2 つの価値観の内容は異なると考えられる。

以上の考察から、Dasgupta の “事実と価値” の “Conception” は、“事実と価値の絡み合い” を認める “The Non-separatist View” であると考えられる。そして、Su and Colander [2013] が研究した Putnam-Dasgupta 論争の紛糾の原因は、Su and Colander [2013] が指摘した価値の分類の仕方をめぐる見解の相違ではないと考えられる。Putnam-Dasgupta 論争の紛糾の真の原因は、Putnam and Walsh を含む Su and Colander [2013] 以前の “事実と価値” の論者が、人間の能力に関係なく外界に存在する真の実態としての事実と、認識や思考の能力に限界がある人間が内面に形成する事実認識とを明確に区別していなかったという、Facts の定義の不備にあると結論づけることができる。



## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 91 号	氏 名	椿光之助
論文題目	”事実と価値”に関する一考察 -Dasgupta [2001] の若干の検討を事例に-		

## (論文審査概要)

申請者の論文の内容は次のとおりである。

## ＜研究の対象＞

自然環境・社会環境ともに情勢が大きく変化している現代社会では人々の生活の豊かさをいかに持続可能とするかが重要な問題となる。本論文はこうした持続可能性の確保のための対策について考察するための基礎的作業として、情勢が大きくかつ急速に変化する際に、情勢の変化を把握するための事実認識と、情勢の変化に適応するために必要な価値観のあり方に注目する。この問題は先行研究においてはDasguptaらによって“事実と価値の問題”として扱われてきた。本論文は、こうした先行研究者の研究の中で特にPutnam-Dasgupta論争に焦点を当て、この論争の真の争点の発見と論争の決着を試みるものである。

## ＜研究の方法＞

主たる方法は先行研究の詳細な再検討である。とくにその過程において分析・考察のための独自の道具立てを工夫していることは大きな特徴である。

## ＜考察の内容＞

概略：序章と第1部ではPutnam-Dasgupta論争に関わっての“事実と価値”の問題が課題として設定され、第2部ではその本格的考察のための準備として「“事実と価値”のConceptを表わす基本フレームワーク」の構築、Dasguptaにおける相対化された科学的事実認識と「機能不全の社会」という理解の提示、そしてDasguptaの論述からの行動原理PDの導出が行われている。これらは最終的にはPutnam-Dasgupta論争の決着のための分析の道具立てとなるものである。続いて第3部において示されるDasguptaの考えを発展的に総合したところの「Dasgupta[2001]に基づく方法」もまたこうした道具立ての一つである。こうした道具立てを用いて筆者は「重要な問題への合意形成に向けた一方法としての行動原理PD」の有効性を踏まえつつも、さらにその限界として人間の事実認識の能力における困難と、多様な価値観をもつ人々の間で事実認識を共有することの困難を指摘し、さらにそれを踏まえた上で合意形成にもう一步近づくための要素としての科学的事実認識の共有の重要性を論じる。以上の分析枠組みに基づき、最終テーマであるPutnam-Dasgupta論争に関しては、こうして明らかになったDasguptaの理解する事実とは「機能不全の社会」で形成される不完全な認識としての“fact”であったこと、しかし、Putnamらはこれを絶対的に正しいという意味での“FACTS”と読み誤っており、これがPutnamらによるDasguptaに対する誤った批判を生む原因であったと結論される。

各章の論述：以上の論述の骨子を各章ごとにやや詳しく述べると次の通りである。

序章（ここでは研究背景、目的、方法、基本概念の概要説明がなされている。）

第1章（ここでは先行研究の検討から本論文の課題をPutnam-Dasgupta論争の解決に設定することが述べられる。）Su and Colander [2013] は次のように理解する。Putnam and Walshの“事実と価値”の“Conception”は、事実と価値は絡み合うものであって分けられないという“The Non-separatist View”であり、一方、Dasguptaは“事実と価値”の両者は分けることができるという“The Separatist View”である。ところがPutnam and Walshは、Dasguptaの“事実と価値”の“Conception”を、“事実と価値の絡み合い”を認めない“The Naïve Positivist View”であると捉えたことから、論争の焦点が食い違った。Su and Colanderの上の理解においてで問題となっ



ているのはDasguptaの見解がSeparatistまたはNaive Positivistであるのか否かであり、その焦点はDasguptaが事実と価値の絡み合いをどう見ているかにある。本論文はこの問題に焦点を当て、Dasguptaをはじめとする諸論者の見解を詳細に検討し、論争の決着を試みることを課題とする。

第2章 Dasguptaの叙述はある部分では“事実と価値”の絡み合いを認め、ある部分ではそれらの明確な区別を行おうとしているように読める。しかし先行研究ではこのことが明らかになっていない。

第3章 Dasgupta [2001]は福祉を持続可能な発展を測定する指標として位置付けている。

第4章 Dasguptaの福祉の測定方法の考え方においては事実認識と価値観(の変化)が福祉に影響を与えると考えられる。

第5章 その影響を与える経路の考察に当たっては筆者(椿氏)の構築した基本フレームワークが有用である。これによってDasguptaにおける事実と価値の意味をよりよく考察できる。

第6章 Dasguptaの記述を整理することによって、“事実”には、外界の実態を認識する能力に限りのある人間が形成する科学的事実認識としての“fact”、外界の真の実態としてのfacts、そして正確にfactsを描写している絶対的に信頼できる事実認識としてのFACTSがあり、Dasguptaは自らのそれを“fact”と認識している。

第7章 われわれを対象とする社会は、政府も市民も不完全情報しか持たないという意味での「機能不全の社会」である。

第8章 このような社会に関して、Dasguptaの論述から行動原理PD(価値観の争いを措き、事実認識に集中することで共通合意に達しやすくなる)を導出できる。しかしこの事実認識の形成においては、各個体間の感覚器、経験の記憶、価値観、気質の中心的部分、文化の知識の相違が共通の合意形成に限界をもたらさう。

第9章 この限界を解決しようとする際、Nelson [2009]に基づく方法(他者の考えをシミュレーションする)は膨大な情報処理を必要とするがゆえに機能不全社会では適用困難である。

第10章 この行動原理PDの限界は科学を媒介として使用する方法によって一定程度解決され得る。

第11章 以上に示されるDasguptaの考えの整理・再構成に基づき、Putnam-Dasgupta論争は次のように決着される。

Dasguptaの“事実と価値”の“Conception”は次に示す根拠によって“事実と価値の絡み合い”を認める“The Non-separatist View”であると判断される。①Dasgupta自身が、“事実と価値の絡み合い”を認める記述をDasgupta [2001]において行っていること。②Dasgupta [2001]の“事実と価値”に関する記述には、価値観を“epistemic values”(科学を科学たらしめる諸価値)と“non-epistemic values”(それ以外の諸価値)に分類することに繋がるような記述等の、Dasguptaの“事実と価値”の“Conception”が“The Separatist View”であることを示す証拠はない。③Putnam and Walshを含むSu and Colander [2013]以前の“事実と価値”の論者は、人間の能力に関係なく外界に存在する真の実態としての事実(facts)と、認識や思考の能力に限界がある人間が内面に形成する事実認識(fact)とを明確に区別していない。ところが、Dasguptaの福祉の測定方法の前提条件としての社会情勢は、人々が不完全情報に直面する「機能不全の社会」であるがゆえに、そこでは人々の思考や認識の能力に限界があり、そのもとで形成される事実認識は、外界の真の実態としての事実とは明確に区別される。そして、この事実認識が価値判断に動員された時、価値観となるのであるから、Dasguptaにおいては事実認識と価値観を明確に区別することはできない。以上より、本論文は、Dasguptaの“事実と価値”の“Conception”は“事実と価値の絡み合い”を認める“The Non-separatist View”であること、そして、Su and Colander [2013]が研究したPutnam-Dasgupta論争の紛糾の原因は、Su and Colander [2013]が指摘した価値の分類の仕方をめぐる見解の相違(「価値観が違うから政策が異なる」)ではなく、Putnam and Walshを含むSu and Colander [2013]以前の“事実と価値”の論者が、真の実態としての事実と、能力に限界がある人間が内面に形成する事実認識とを明確に区別していなかったという“事実”の定義の不備にあったと結論する。

(なお巻末に地球規模の気候変動問題に関する補論、すなわち本論文を踏まえて今後こうした問題に関してどのような考察が可能と考えられるかにふれた今後のための覚書が加えられている。)



## 評価

### 1. 創造性

申請者は Putnam-Dasgupta 論争に関わる文献を十分に渉猟し、そこでの問題点を正しく理解している。さらに本論争の分析過程でその解明のために基本的フレームワークを作り上げ、これを重要な手掛かりとして同論争の決着を導き出すことに成功している。これは同論争に対する有力な新たな知見の提示・発見であり、優れた創造性を示すものと評価される。

評価：極めて優れている。

### 2. 論理性

本論文の論理構成は、Putnam-Dasgupta 論争の争点の整理、その争点の考察のための準備としての Dasgupta の考えの整理・再構成(福祉の測定方法の整理、そこにおけるジェニユイン・インベストメントの重要性の指摘、ジェニユイン・インベストメントの決定要因と“事実と価値”の関連性の明示)、“事実と価値”の問題を分析するための“基本フレームワーク”と Dasgupta に特徴的な事実認識の仕方と「機能不全の社会」の明示、合意形成の一方法としての Dasgupta からの行動原理 PD の導出、その限界とその一定の克服策の提示、である。こうした論理構成は本論文で設定した課題の解決のために有効・妥当な接近方法であると評価される。

評価：優れている。

### 3. 厳格性

本論における研究課題を解明するために、申請者は Putnam, Dasgupta, Su and Colander, Gorski の関連文献をち密に読解・分析し、その意味を正しく読み取っていると評価される。

評価：極めて優れている。

### 4. 発展性

本論文は Putnam-Dasgupta 論争の決着という成果を上げているが、その論証の過程で構築された様々な道具立てと、結論部分に示された科学的認識の共有を広げることで重要な状況変化に対する合意形成に近づくという方法は、補論でもふれられている地球環境問題をはじめとする様々な具体的問題の検討に応用され得る可能性を持つものと考えられ、この点で発展性を持つものと評価される。(最終試験において意見が交わされた科学の知識や科学の価値観を共有するための教育訓練の重要性の問題はその一例であろう。)

評価：優れている。

以上の諸点を総合的に評価した結果、審査委員会は本論文の評価を次のように判定した。  
全体の評価：極めて優れている。

以上より審査委員会は本論文審査結果を合と判定した。